

〔巻頭言〕

地域社会に根ざしたリハビリテーション

中野善達

1970年代から、国際社会とりわけ開発途上国を中心的ターゲットとして、新しいタイプのリハビリテーションが、国連の諸専門機関によって展開されてきた。地域社会に根ざしたリハビリテーション (community-based rehabilitation : CBR) がこれである。

障害者の家族や障害者自身もその担い手とする、地域社会開発の一環としての CBR は、WHO による『障害をもつ人びとに対する地域社会での訓練・研修』を強力な手引書として活用してきた。WHO でこのまとめ役となり、現在は国連開発計画で活躍しているヘランダー (E. Helander) 氏が、手引書では簡潔にしか触れられていなかった CBR の背景にある理念や、適用される原則について、詳細な意欲的かつ刺激的な著作を公にした。

この本を、私と同じ職場の方やかつて同じ職場におられた方、リハビリテーション・コース修了生の方が、国際 CBR 研究会の方などと共に翻訳した。これが、このほど公刊された、ヘランダー著「偏見と尊厳－地域社会に根ざしたリハビリテーション入門」(田研出版) である。

著者はリハビリテーションを、「個人に対する障害のインパクトを軽減し、彼もしくは彼女が自立、社会的統合、より良い生活の質および自己活性化を獲得することを可能にすることを旨とする手段を含むもの」とし、リハビリテーションには、障害者の訓練だけでなく、社会の全体的システムへの働きかけ、環境の調節および人権の保護までを含むとし、きわめて幅広い、包括的な概念規定をしている。そして CBR を、「障害者の生活の質を、サービス提供の改善やより公正な機会の提供、彼らの人権の促進と保護によって高めようとする方略 (ストラテジー)」としている。

障害をもつ人びとのリハビリテーションは、医療モデルを基本としたリハビリテーション・センターなどの施設を中心として行われてきたが、こうしたサービス提供ではさまざまなニーズをもつ多数の障害者に対応できないことが次第にはっきりしてきた。そこで、新しいタイプのリハビリテーション、CBR が提唱・実践されるようになってきた。「万人のためのリハビリテーション」は、CBR が基本となるべきであろう。もっとも、地域社会によるサービス提供だけで、あらゆるリハビリテーション・ニーズが充足できるわけではない。CBR では、質が高く、技術的に適切で、地域社会レベルでのサービスでは解決できない問題への対応法も重視されている。

わが国で推進されている「地域リハビリテーション」は、その多くが、専門家が主導権をとる従来のパターンを継承しているので、本来の意味での CBR ではない、といった批判がなされている。ヘランダー氏の著書によって、CBR への誤解や過度な期待が解消され、正しい理解と実践の展開が期待される。